

今週の本棚・新刊：『検証 原発労働』＝日本弁護士連合会・編（岩波ブックレット・525円）

福島第一原発事故の後、高い放射線量の中で過酷な収束作業が続けられた。海外から「フクシマの英雄五〇人」とたたえられた原発労働者の実態をさぐるメディアの調査報道も始まっているが、非正規雇用問題に長年取り組む日弁連は、その特異な雇用形態と労働の実情を他に先駆けてえぐり出そうと試みた。

厚いベールに包まれた原発労働を解明するため、日弁連は昨年六月、福島県いわき市などで聞き取り調査を実施した。六〇代の下請け経営者、三〇代の下請け作業員、五〇代の作業経験者の証言から浮かび上がるのは、一般的な単純労働者派遣において明るみに出た諸問題が、原発の労働現場では相変わらず横行し、とくに事故発生前にはほとんど野放しにされていたことだろう。

東京電力の下に四次、五次もの下請け会社や派遣会社がぶら下がり、一人当たり一〇万円の日給が手取り一万円前後にまで吸い尽くされる多重ピンハネ。社会保険や健康保険への未加入。場当たりの被曝（ひばく）線量管理――。全国に散らばる原発は、こうした労働に依存して稼働し続けてきたという。原発の存廃を論議する前にぜひ読んでおきたい。（卓）

毎日新聞 2012年3月11日 東京朝刊